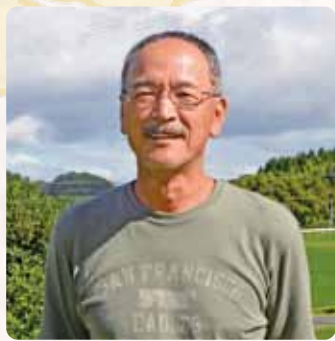


皆で一つのを
つくり上げる良い経験に

かど た しんいち
歌い手 門田 信一 さん(60)

漆地区に移住してきて11年になります。娘が小学校に通っていた縁で、踊り手となりました。伝統ある郷土芸能に関わるなんてなかなかできない経験ですから、とても嬉しかったのを覚えています。娘が卒業してから踊り手として参加しており、昨年からは歌い手となりました。準備や練習は大変ですが、子どもたちにとっては皆で一つのをつくり上げる良い経験になっているのではないのでしょうか。



↑ 巴拉太鼓

始良市 / 漆地区

漆バラ踊り

地域と学校が一体となり
受け継がれる太鼓踊り

始良市蒲生町漆地区に伝わる「漆バラ踊り」は朝鮮出兵の凱旋祝いとして島津義弘が踊らせたのが始まりと伝えられています。踊りの特徴は、何といっても竹バラで作る「バラ太鼓」です。「バラ」は方言で「ザル」のこと。漆バラ踊りは、竹バラに和紙を貼り、太鼓に見立てることから太鼓踊りの一種と考えられ、太鼓を鳴らして稲につく害虫を追い払う「虫追い」の意味もあると言われています。

踊りではこの「バラ太鼓」を回し、ウツベ(バチ)で打ち鳴らします。踊りに参加するのは、太鼓を持つ人のほか、鐘打ち、ドラ打ち、歌い手も合わせて総勢30人ほど。

「飛んだり跳ねたりしながら、渦巻き型の円陣をつくったり崩したりするユニークな動きをします。背中に長い矢旗を付け、太鼓を持って30分近く踊るので結構きついですよ」と話すのは、歌い手の門田信一さん。

昭和に入り、漆バラ踊りは一時期途絶えましたが、昭和52年に再開されました。今では始良

鹿児島には、古くから受け継がれてきた個性豊かな祭りが各地に残っています。今回はそんな祭りの中から始良市蒲生町に伝わる「漆バラ踊り」をご紹介します。

市立漆小学校の全児童と教職員を中心にした地域の有志たちにより、毎年9月下旬に開催される漆地区と小学校との合同運動会で披露されています。漆小学校校長の上原幸一さんは「昔の踊りと今の踊りは少し違ってもいいかもしれませんが、受け継ぐことが大事。私たちの代で伝統を終わらせるわけにはいきません」と言います。また門田さんも「小学校は地区のほぼ真ん中にあり、この地区の文化の中核的な存在。そこを中心に伝承してきたからこそ、これまで続けることができたのでは」と話します。

漆バラ踊りには、地域の人々と小学校とをしっかりと結びつける役割もありそうです。

始良市



始良市は平成22年、加治木町と蒲生町、始良町が合併して発足した総人口75,959人(平成24年8月1日現在)のまちです。薩摩半島と大隅半島の結末点に位置し、歴史と文化の息吹があふれています。写真は始良市蒲生町の蒲生八幡神社境内にある日本一の巨樹「蒲生の大クス」。国指定特別天然記念物で推定樹齢1500年と言われています。

